原 健三郎先生の思い出

（島根県）
第10回（昭和54年度）団員　山根和枝

原　健三郎先生は、若者が大好きでした。毎年の全国大会で団員の方たちと会えるのをとても楽しみにしていらっしゃいました。

山梨県、清里・清泉寮での全国大会でのこと。早朝の希望者によるバードウォッチングに参加なさっているのにはとてもビックリしました。専門員の説明にうなずき、望遠鏡をのぞき鳥の小さな動きに見入っていらっしゃいました。けっこうな距離の山道を団員たちと楽しそうに歩かれるのには驚きました。お年を召しても好奇心旺盛な素敵な方でした。

先生にはいろんなこと、たくさん、教えていただきました。よくおしゃべりになるように見えるけど、本当は寡黙の方だったように思います。

「感謝。感謝。」の方でした。
明るかった。楽しかったです。
神様を信じていらした。
謙虚なお方でした・・・・・。

平成８年全国大会・仙台にて

勤労青少年協会の事業活動に協力します。

（栃木県）
第10回（昭和54年度）団員　坪子政子

私は、昭和54年度にカナダ・アメリカへ派遣していただいてから現在まで“アッ”という間でした。７日間という短い期間でしたが、とても中身の濃い時期を過ごしたと思っています。

年に一度の全国大会も当初ハラケン山荘の近くにある那須ハイランドパーク内でのバーベキューの夕食会に、原先生もビールをつぎながら私たちの中に入って楽しそうにされていた姿を思い出します。

先生の奥様も私たちの話を聞いて下さり、その姿に魅力を感じ、あこがれを持っておりました。年に一回お会いするのが私にとっての活力の基でございました。

最近では、私の娘が中学生のときに、当協会の海外派遣プログラムにより、アメリカへ90日弱行かせていただきました。会話には苦労したそうですが、ホストファミリーの美千子ダンクリィ一家のサポートのお陰で、その後の彼女の生活に役立っていることを感謝いたしております。私は、これからも、年一回の全国大会を楽しみにしております。協力を惜しみませんョ。

平成９年度全国大会懇談会会場にて　原先生御夫妻・団長、団員とともに

協会創立40周年に寄せて

（茨城県）
第11回（昭和55年度）団員　伊藤龍司

派遣団のことを考えると思い出はありすぎるくらいあります。まず結団式後の30人全員が中野サンプラザの門限遅れで閉め出されこと。（このことは、皆が打ち解けるきっかけとなりました。）

平均睡眠時間２～３時間で過ごした２週間のアメリカ・カナダ視察は、その後海外に行く機会はあってもこの時ほど楽しく充実した時間を過ごしたことはありません。数年後ホームステイ先で知り合ったハイディから来日予告の手紙＆電話が入り日光観光に出かけたこと、彼女はその年淡路での全国大会にも参加し関西では同じ団の林君が世話をしたということもありました。

全国大会でもハラケン山荘や清里、橿原でのことなど枚挙にいとまがありませんが、これがきっかけで団員同士が結婚した例もあります。大阪在住のチャーリー（日本人）たちもその１組で、大阪での全国大会のパーティー後、チャーリー夫妻と彼女と同じ団のイチロー君の４人で一緒に飲み、翌日は複数年度横断的なメンバーで通天閣や、吉本新喜劇、くいだおれ太郎などを見たりと楽しい休日を過ごすことができました。違う年度の団員でも同様な体験を持つもの同士連帯感があるためか違和感なく楽しむことができ、それがまた新たな思い出になるため久々に会ったときでもスーっととけ込むことができます。

本当に枚挙にいとまがないほどの思い出ができ、たくさんの友人が全国にできたわけですが、それもこれも派遣団に参加させていただいたからであり、元はといえば派遣団を毎年送り出してくれたからであり、全国大会を毎年開催してくれるからです。正に“継続は力なり”の言葉どおり。毎年全国大会を楽しみにしており、これからも大切にしていきたいと思います。

静岡県にて

「継続は力なり」を忘れずに

（滋賀県）
第14回（昭和59年度）団員　田中一郎

1984年、私が第14回アメリカ親善派遣団に参加して、四半世紀になろうとしている。最初に降り立ったサンフランシスコでは、澄んだ空気と抜けるような青空に、朱色のゴールデンゲートブリッジが私たちを出迎えてくれました。ニューヨークのブロードウェーでの真夜中の散策では、マンホールから立ち上る蒸気にドキドキ感を味わいながら、この街のエネルギーを感じ取りました。ナイアガラ爆布では、メープルの色鮮やかな紅葉を見たかと思えば、その日の内には南部アラバマ・アニストンに移動し、いつになったら沈むのといいたくなるようなまぶしい日差し‥等々。今も鮮明によみがえってきます。

陽気で心温かい現地の人たちとのふれあいや、全国から集まった30名の仲間たちとの友情を育みながらの旅は、若い私たちの心に自由の精神に満ちたアメリカという国を強く印象付けました。その後、私は３年半勤めた会社を退社し、サンフランシスコの郊外に１年間ホームスティーをして学校に通うことにしました。その動機は、派遣団のホストファミリーとの間で気持ちは伝わっても、言葉が通じなかった悔しさと、アメリカという国をもっと知りたい、暮らしてみたいという強い思いからでした。

自分の意見をしっかりと持つこと、そして、相手の意見にもしっかり耳を傾けること、やらないで後悔するよりはやってみること、チャレンジすることの大切さは今も私の生活信条になっています。

原前会長が、次代を担う著者たち（勤労青少年）を海外に送り出し、国際交流を通して視野を広めさせることで、世界に通用する日本人を育成しようとされたゆえんはここにあったのかも知れません。（詳しくは、先生の私の履歴書をお読み下さるとよいかと思います。）

現在は、会社勤めの傍ら地元において、まちづくりの活動を勢力的に行っています。原先生のアイデアをいただいた、「コーヒー一杯でチューリップいっぱい作戦」では、住民からの募金をもとに、毎春、20,000本のチューリップの畑が出来上がります。原先生がよく言われていた「継続は力なり」この言葉を忘れずに、私なりにできることを実践していきたいと思っています。

ニューヨーク、ビレッジゲートへジャズを聞きに行く

ひとつぶの種から

（山梨県）
第16回（昭和61年度）団員　佐藤光子

派遣団に参加させていただいてから全国大会には毎年のように参加させていただいています。その魅力の一つは会長始め多方面の方のお話が聞けること、もう一つは観光を兼ねていろんな土地に行けること。中には多分一生この駅に降りることはないという所もあります。そしてそれらをより楽しくさせているのは個性豊かな参加者の方たちとの交流です。正直私は皆さんの素性をよく知りません。詳しい職業も年齢も出身も家族構成も生い立ちも。しかし顔なじみの方はもちろん久し振りの参加で何年振りかで会ってもタイムスリップしたかのように気心の知れた中にすぐ戻れます。また、代が違っても同じ時間を楽しく共有出来るのです。こんなに地域も職種も年齢も違う交流は貴重です。毎年場所も参加者も変わりはしますが、いつもそこには変わらない皆がこの時を楽しもうという共通の気持ちがあるからでしょうか。

原健三郎先生の時代も、現会長ご夫妻も周りの方たちもいつも満面の笑みで私たちを迎えて下さいます。皆さん多方面でご活躍でご多忙な方たちなのに隔てなく私たちと交流して下さり、ゆとりと器の大きさにやはり信念のある方たちは違うなあといつも感心しています。

原健三郎先生が確か86歳の時「わしゃまだまだ現役じゃ」とおっしゃっているのを聞いた時、うわーすごい！と思いましたが、本当に97歳でお亡くなりになる直前までまだまだやりたいことが沢山あるという内の一つ一つを前向きに勉強し続けていらしたことには驚くばかりです。全国大会に集まる皆さんも本当にエネルギッシュです。正に先生というひとつぶの種が実をつけまたその種が各地に広がりまた実をつけている。そんな風に感じます。また皆、さり気なく優しいのです。だから自然と私も優しい気持ちになります。

いい刺激と沢山のエネルギーをもらい帰りはいつも暖かな気持ちと感謝の気持ちでいっぱいになります。

原健三郎先生は生前「継続は力なり」とよくおっしゃっていました。きっと続けるのはとても大変な事だと思いますが、毎年続けて下さっている協会の方々に深く感謝致します。

平成14年全国大会　東京　ホテル浦島にて

第3回勤労青少年フィランソロピー体験米国派遣団の思い出など

日本電気労働組合　（東京都）
副中央執行委員長　梅本　洋一郎

私が第３回米国派遣団に参加させていただいたのが1996年秋のことですから、あれからもう12年が経ちます。今回石谷美智子団長から、当時の思い出に関する寄稿依頼を受け、改めて当時の報告書を読み直してみました。まだスマートな体型だった自分の写真に目が奪われたことはさておき、2001年の同時多発テロが発生する前の貿易センタービルで実施したインタビューの様子、ワシントンやサンフランシスコでのボランティア作業など、懐かしく当時のことを思い出しました。当時の視察の中で興味深かったことは、一般企業でのボランティア活動が活発なのと併せて、町のデイケアセンターやシェルターで働く一般のボランティアの方がとても多く、かつ当然のことのように働いていらっしゃる姿でした。慈善事業を重視する宗教観が背景にあるとのことでしたが、こうした活動の定着度合いがまだまだ日本とは違っている点に考えさせられたものです。

ワシントン　議事堂を背に

ヴァージニア
老人介護施設にて

中心人物は施設オーナーであり、
入居者でもある。

私は、現在も労働組合活動に携わっています。昨今では企業の社会的責任といった観点からも社会貢献活動の重要性が増しており、私どもの会社でも自然災害の際の労使共同募金や、少し毛色は違いますがペットボトルのキャップ収集など、様々な活動が行われるようになりました。とはいえ、いまだイベント的な要素も強いのが実態です。こうした取り組みを特に構えて行うのではなく、自然に実施できるようになるためには、地道に継続していくことが重要だと思います。引き続き米国派遣団での体験も参考にしながら、労働組合の立場から取り組んでいきたいと考えています。

改めまして、米国視察団参加の機会を与えていただいたことに深く感謝申し上げます。

6　エピソード

当協会海外親善派遣団一同が サンフランシスコ大地震の際 義援金を送る

勤労青少年海外親善派遣団 '79, 89, 94年度 団長経験者
当協会理事長　　播磨　昭二

1989年の10月当協会の第19回海外親善派遣団の団長として、私にとっては２回目のお役目を引受け総勢31名でアメリカへ２週間の旅をしました。

親善派遣団のメンバーは、全国の勤労青少年ホーム等から推薦された20歳から25歳までの勤労青少年29名と添乗員に私の31名でした。選ばれた青年たちは、公務員、会社員、設計技師、自動車整備士、看護師、外交員、ゴルフのキャディ等多種多様の職業人でした。

アメリカへは、ミシガン州デトロイト経由でフロリダ州のオーランドへ。秋の東京から真夏を思わせるディズニーワールド社を訪問し、東京の山手線内側の1,5倍という施設の広大さに驚きました。

従業員３万３千人が働くディズニーワールド社を後にし、ナイヤガラフォールズを経て、ワシントンD. C.の日本大使館、アメリカ労働省等を訪問しました。

その後、ニューヨークに滞在中にサンフランシスコ大地震があったことを知りました。そのとき、私の脳裏に浮かんだのは親善派遣団一同で義援金を贈りたい。そして、義援金をどこへ持参したらよいかでした。関係者に調べてもらったところ、サンフランシスコ市内は現在停電していて、我々が行くオハイオ州のセントメリー市で３泊４日のホームステイが終わったころにサンフランシスコ市内に入れるし、予約しているホテルも無事だということが分かりほっとしました。

義援金は、サンフランシスコの赤十字社に持参しました。同社の会長が出て来られて、日本人の旅行者から義援金をもらったのは初めてだと大変喜ばれました。このことは、協会の原前会長から閣議に報告され、褒められました。後日、知ったことですが、関東大地震のときにはアメリカから日本が義援金をいただいたそうで、我々の貧者の一灯がそのお返しの一部になったと思っています。（完）

サンフランシスコ　赤十字社前にて、赤十字社会長と記念撮影